

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023. 9



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下した北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地 中 海

1

二〇二三年 九月号 (通巻七八四号)

遊覧寄港 〈山と釣りと短歌〉

丸山哲史 42

■ 欧境月旦
篠弘「戦争と歌人たち」

西堤啓子

◇ 今月の二十首詠……運河のほとり

小林能子 2

◇ シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子 44

■ 作 品 A

中島央子・永田進一他 4

■ 七月号作品批評

A 関根和美・山本 孟 62

中川富美子他 20

B 岩井久美子・宍戸千佳子

中林昭三他 46

C 桃原佳子・酒井治子

長谷良恵他 56

C 永塚節子

大久保徳子他 70

オリーブ集

杉山睦子・鈴木剛之他 36

久我田鶴子 18

◇ 今月の二人

吉田美佐子・遠藤美智子 16

今月の二人・作品評

私と短歌との出会い (253)

神戸良三 19

安部律第一歌集『四月の翼』出版お祝い会・報告

上林節江 83

■ 鑑賞・三好直太の歌 2 〈労働〉

久我田鶴子 15

最近の歌誌より

〔編集部〕

■ 〈第一歌集を読む〉 6
ばかりようこ歌集『星を約する女』

西堀啓子 32

創刊70周年記念地中海全国大会(浜松大会)ご案内

84 86

一くれないの拾持 1

西堀啓子

クリップ 35 神田通信 表3

◇ 秋のアンソロジー 〈それぞれの秋の心〉

仲西正子 34

(表紙デザイン) Taro & Kōki

運河のほとりに

小林 能子

昭和十年生まれ。
羊グループ所属。
歌集に「計算尺とゴジラ」がある

災害にこれも備へか鮮やかな「黄色いバンダナ」区役所の策
配られし「黄色いバンダナ」災害時にドアに掲げて無事を示せと
寝返りもならず地震の衝撃に頭は醒めて窓白むまで

リハビリはコンビニまでの安全が確かめられて課題の一〇〇〇歩
一こみ置き場カラスと馴染の四点杖ふんばりて通りのコンビニ目指す

嘔^{おど}しにあらず家族に伝へよと咽^{ひの}こむ喉に手を当て医師は

刻み食になじまねば嘔むひたすらに嘔みては背筋伸ばし飲み込む

久々の瑠子の電話「お誠^{せい}さんが、彼が死んだの」とやはらかき声

管楽器奏者の夫に喉の麻痺 わりなき病にたちろがぬ妻
延命措置拒否を託して再入院 オーボエ奏者吉田誠三郎
終の日も「オーボエ協奏曲」を聴き瑠子の手を抱き眠りゆきしと
イースターの「木管四重奏」オーボエの音色も運河のほとりに響く
リハビリの一〇〇〇歩はコンビニまでの道 横浜遊歩道ヨコハマプロムナードにつづく
開港場名残りの台場も海苔問屋も遠く崖の上にひろがる団地
くさむらに倒れし自転車ハンドルに撤去予告の札下げるをり
ファミリーマートに寄りて乗り捨てし自転車か人目に懐脂のサドル淋しく
撤収日せまる放置の自転車と走りだしたき横浜氣候ヨコハマ
往復で二〇〇〇歩あまりの散歩道ここに空飛ぶ自転車も欲し
E・Tを宇宙に還すとエリオットが月夜に漕ぎし自転車「桑原」
置き去られ撤収されし自転車を思ふともなく思ふ雨の日

作品 A

永塚節子 夏

銀

日差し浴び上へ上へと伸びゆけるのうせんかずらは元気のみなもと
濃き色の花好まねど夏は別のうせんかずら黄色のカンナ
時の至り頭でつから青虫の変身したるは黒揚羽蝶
放たる黒揚羽蝶一瞬の間あらずして鳥に捕まる
背負う荷のあまりの重さにたじろぎぬ十歳も若きうからの電話
胸内のこごる重荷に解決の手当てはあらず聞いているのみ
長いこと命の電話に聞わりし友は言いたり聞いてあげるだけ

中島央子 アガパンサス 森

夏至の今日北半球のわが庭にアガパンサスのむらさきに咲く
午後五時の日脚のびたる西の空 上昇一機の平安見つむ
水無月の雨に濡れるる表札の亡父の筆跡頗りをひそむる
封筒を開けば友の来しことく歌稿七首に近況を知る
両脚の足裏叩き百たたき青竹踏みを夜々くり返す
みどりこが親につかり踏ん張つて立たむとするや果てなき未来
半夏生めぐり巡りて五十年夫の忌姑の忌白百合にはふ

永田進一 夏 頭 森

蜘蛛の巣のようにはあらぬ東京の地下鉄路線図まずは目で乗る
地下ふかく下りてホームに息を吸う大江戸線の壁に向かいて
まっすぐな玉砂利の道閑かなり明治神宮鳥居の奥の
大都会の喧騒を吸いおおらかに木は芽吹きいる代々木公園
日曜の代々木公園に鳥は鳴き若きらの声ここは安穀
緑深き代々木公園さし交わす枝に巣居あれ地に人の声
訪ねば床のべくれし八歳は少年の顔きびきびとして

中村博 風鈴の音 沖

夕顔の苗を植えつつ棚作る毎年のこと亡妻の慣わし
会釈して見知らぬ人の通りゆく散歩の人の夕顔鑑賞
わが庭に桔梗の花の咲き初めて小雨降るなか亡き人の翳
『ウクライナ知るための65章』読めばコサックの末裔なりとう
スマホには線状降水帯夜中まで届いて駆がし猫の恋ならむ
沖縄の慰靈碑へ花束向けたる昭和の防人手指の太し
どの顔も不安げに立つマイナンバー拒否の健康保険証の人

ゼレンスキーカー統領は命がけGセブン出席如何なる未来に
大学院最終生の孫娘大修士論文のキー叩くらん
京西陣創作あられの「宗神」や初めて知りてボリボリ食みぬ
青紅葉清流に浮く京菓子の羊羹いただきティータイムする
ご近所の東京土産の「こまたまご」胡麻の風味の黒餡美味し
五月晴れ今日も籠もりて過ごさんやころころ転びて風鈴の音
ウクライナのダム爆撃受け決壊す街は無残な泥水の中

西堤啓子

アメリカ楓

・天

ぱぱりょうこ

ややややに

・鹿

森暗く迷い道でも忘れない 親指姫はつばめに乗つて
朝の日傘かたむけゆけば遊びだす指がリュートを空に響かせ
缶コヒーと一冷えてのどこしさえざえとアメリカ楓の若葉の下に
新しいページが聞く 立ちどまり朝の光を浴びるサンダル
底知れぬウクライナの戦 どこまでの破壊 ダム爆破さると
「七十一年間ありがとうございました」「レコード芸術」終刊す
合歎の花池に照り映え怒り繼ぐ荒ぶるこころ放たれぬまま

萩葉子 白い花

・銀

まっ青な六月の空 キャッチボールの声聞こえくる
いちにちが大きく変わることもなく綻剤服用朝に晩に
白い花が咲きました 友にあいたい水無月二日
母の夢みること多い日帰りの墓参りさえ行かれなくて
ユニクロのTシャツ三枚着まわして見舞いの通院踏ん張った夏
樹の下に見なれぬ白い花が咲き通りつかなかつた日の街道おもう
縁側でギターひいてる兄の語面「乙女の祈り」傍らで見ている

白子れい ひとり旅

・洛

ひさ久に新幹線のひとり旅坐す窓ぎわの景色が走る
大鳥居くぐれば白き参道の迎えくれたり箱根の神社
御神水いただきホッと息をする式典すみし御社に坐し
吾の短歌お皿に書かれ御神前に飾られるにひたすら感謝
予約せし旅館につきて温泉に吾ひとりなり伸びのびつかる
コロナ禍の影響なりや食堂に現れたるは吾いれ三組
ゆったりと心も身体も湯につけて思いていたり残りの日々を

一滴のしづくやややに太りゆきまろび落ちたり梅雨なかやすみ
タンボボの綿毛あまりのみことさに心奪わるときにしまかす
蚊をつれて帰りたるらし耳元で囁きとおず人恋いとや
きれぎれの睡りのあいまの夢に来て亡き大笑みぬ 十三年忌
よく笑う汝だったねいまだ尚わが淋しがりやは見すかされ放し
身が病めば魂斯くも綻ぶるか無器用なる指で繕いたるも
この年も春爛漫を見逃した その分やさしさを人より給う

浜谷久子 土

・地

持続なき時間はいつか消えていて変わらぬ畠野の風景広がる
生命の神祕の無言土の中芽が出るまでを黙す趙たち
鉄豆の種二十粒は四本のみ芽生えて育つ光の中を
雨を待つ時間とともに苗とわれ鳴門金時、南瓜、西瓜
繁る茱萸今年初めて大き実の朱色をぼつたりぶら下げている
紫陽花の大輪とりどりの咲く畠道行く人に切り取る朝も
どこにいても帰つていきたい土の畠耕す人の姿が見える

檜垣美保子 夢

・昴

ひとはみなさびしきものか水無月の夕べしゃらしら米洗う音
ねむのきは川にかたむき花咲けり夢をはぐくむあわきくれない
閉ざされて錆色の浮く水門をしおからんほかすめ飛びゆく
音たたぬ少年の靴のはこび来し砂粒は灯にさらされている
椅子を引く音たかく不意にかさなればそれぞれ男の子くつきりと立つ
塩むすび所望いたすとおとげ言う少年に三角むすび手渡す
口の端に飯粒ひとつそのままにじんけんの勝ちを誇る少年

福田庸子 春の息

・今

船田清子 桜の紫

・天

新しき芽生の息の充ちゆくをしめりもちたる春の林は
登山靴に曾根の木の蕊残りたり古道あらたな春を迎へて
重なる去年の朽葉のやさしみを春は告げをり続く古道に
菜の花のゆれてにじめる春の日よ室瀬の棚田に水張られたり
青苗にゆつたり鶯の群むたる六月の田は生命伸ばせり
休耕田に夏薔薇の花白く燃ゆ食糧事情の変りゆく世ぞ
小さな手足のぞける胸元よ若き父親スマホ片手に

藤田美智子 漱 新

英語の授業を抜け出しきたる少年が生まれし町の祭りを語る
「甘えてる」と言ふはたやすし教室に入れぬ少女の肩を抱きたり
腹立ちを表に出さぬ君のことホタルブクロは口をつぐめる
名のりたるのみにて電話の切れし夢覚めても耳は声をまさぐる
痛きまで唇を噛みるし夢は何悔やしからむこと思ひめぐらす
白あぢさむ白き朝顔白き花多きわが庭亡き人も立つ
娘だとは言へずに心に溜まりゐる涙を捨てたし 歌を詠みつく

藤森巳行 鈴銀

・銀

ふる里へ通ふ路線バス既になく松本駅にしばし佇む

コロナ禍で帰れなかつた詫びを言ふ父母の墓前に搖を供へて
三年のこ無沙汰詫びの父母の墓線香の煙揺らして風過ぐ

貧しくも丈夫に育てくれた恩拿寿の私は父母に感謝す
拿寿祝ふ同級会は中学生の面影少し残して老いたり
八十年生き抜いたことが歎章と同級生と共に祝はむ

小四の孫がビールを届け来る今日は父の日に一度の

嬉野の宿に咲きるし紫の桜の花色未だしあせず

合唱曲「流浪の民」の練習時窓辺に見しも桜むらさき

国を捨てさまよふ民のありしこと初めて知りぬ戦後間なくに
真夏夜の暑さを凌ぐ手たてはやいかにかなさむクーラーなしに
アイス一本食せずにはをれぬ六月半ば以後の極暑へ対処やいかに
しみつきし暮しの便利結局は团扇に戻れずクーラーだのみ
魚・野菜・乾物・豆腐・さつま揚げ味も香も失せ物価高騰

本元山美子 生と死

・闇

暗闇の篠突く雨に覺めてをり祖母逝きし夜も聴きし兩音
梅雨空を見上げる時に想はるる杳々にかすむ逝きし人々
生きるとは安らげき死の日常を約束せしむ日々の営み
輪ぐぐりて夏越の祓いの草の香がわれの穢れを社に鎮めむ
ヒリヒリと痛みを伴ひやつて来る投げかけた言葉は「死んだつてい
夕間に梶子の白沈みゆく叱りし親の寂しく頭ちぬ
鉄格子出でたるバニラは見上げたる広くて青い空の意味問ふ

牧雄彦 赤穂御崎

・大

水際の巨き茶色の岩にのぼり暮れゆく海を見てゐるふたり
人りつ日に岩の影濃し若きは動かすじいと海面を見つむ
刻々と変はりゆくいはる瀬戸内に浮かぶ小島の影が薄らぐ
真向かへる島かげ絵筆を動かせるわづかな時も色を変へたり
空と海溶けて暮れゆくひとときをカモメか低く海面をかすめぬ
遠かすむ四国の山影夕暮の光うすれて今消えむとす
薄闇を分けて入りくる漁船あり舳先にともる灯が滑りゆく

松浦禎子

斜陽館

・羊

松本多摩子

鷺

・桜

手入れよき朱塗りの廊に腰をかけ太宰治のひと世をしのぶ
縦槍、その豪邸に架けられし階も百年手底にしむ

食事の間上下のありて決まる席その卓いまに黒く輝く

乳母タケの手を握りしめ行き交いし米藏の壁に残る面影

生き急ぐに道化をはさみ筆を捨て彼には長い三十九年

言葉交わすひと日あたり太田治子あなたの父のこはふるさと

「撲ばれし恍惚と不安」の文学碑に彫りこまれたる金の不死鳥

松瀬トヨ子

前田高地

・沖

前田高地の人家近くまで墓の建ち墓に向く戸を人の出入りす

はなやきの未だ残れる夕空に声おし放しカラス消えたり

十冊の雑記娘いだき立ち尽くす言葉の中にたじろぐばかり

藪の中に石垣残り井戸残り古人の影に囲まれる

たわいない言葉つなぎて歌一首厨のなべに煮詰まる白菜

あじさいの花陰歩むかたつむりうず巻きの屋根に露をうけつ

過ぎ去りし日々の書き込み健やかな時もありしよ病みて六年

松永智子

螢

・嵐

夜半目ざめみるとなく見る玄関 螢火ひとつ光りし間

萤追ふ父の背を追ふ弟の影踏み籠持ち行きしわが影

庭の木に萤火放ちうから寄り語り語りしゆふべいまにあたらし

糸杉の梢をはなれ空へ飛ぶ萤火ひとつ声なく見し夜半

梨の花散りくる下のおままごと弟の声いまにふりむく

飛び交ふを見すなりし夜半棚の上の隅あをくともる萤火

その命ひたすらにして青く赤くとびかぶ萤間に立ちみる

宮本靖彦

青梅雨

・凌

年甲斐もなく陽炎に突つ込んで我が自転車は転びたりけり

肉ジヤガの「インカの目覚め」ああ甘し我が食欲の目覚めたりけり
爆心地に「核のボタン」を持ち込んで現状確認のサミットだとよ
好きな歌唄へと言へば君が代を唄ひ出したりこのA-Iは
ヘイトから戦争になる殺してもいいのだあれは敵なんだから

全世界が揃つて核を持ってば良い世界平和に繋がるならば

戦争に備へよ新たな戦前を堅固なシェルターどうする家庭

三浦好博

シェルター

・銚

六月尽草とる公園營がまだ鳴いている勧ますよう
夕ぐれは帰りたいという母育め共に迺こしどきの懐かし
少し先に楽しみ作り娘を訪いぬ一人くらしの今日を生くるコツ
マスクつけわが身を守る児童館自由となりてつける子らなし
気がつけば傘寿の友と三時間マスク忘れて会話の楽し
父母ヶ浜臨海学校に泳ぎし日あめ湯なつかし傘寿の会話
たたくよりたたえあおうとCMはそんな世間に大人も子供も

三好聖三 銀杏の寺

・伊

もとむらしげと 虹の橋

・沖

・そ

土おこしすれば忽ち現れてイソヒヨドリはランウェイモード
鶴が五寸百足を追い詰めて衝えて飛べる足元の劇
サッカーニは興味ねえから「運び屋」を観ればすなわち家族が大事
父五十回忌、母十七回忌の法要を終えて青める銀杏の寺
雨かぜに倒されてなお起上がり意氣の強さを見せる秋桜
つきつきと家族は鰯を釣り上げる。吾には不発の竿あるばかり
雲水ら 团扇太鼓を打ち鳴らし 南下してゆく連香寺まで

御代田澄江

次兄身罷りぬ

・茨

赤子の吾を負ひくれたりし兄なりき六月三日がんに身罷る
鶴見なる施設にがんに身罷りし兄九十四までを頑張り通しぬ
ティラーとて現代の名工たりし兄後継者育成にその名残せり
吾を負ひ仰向に田に漫りし兄吾が呼吸いつとき止まりしと云ふ
通りかかりし人に起され吾が背叩き呼吸吹き返すと直に聞かさる
助けられたる吾はも命永らへて負はれし兄の葬儀に列す
声も良く唄も巧かりし兄偲ぶフランク永井の「夜霧の第二国道」等々

茂木斌

「順調」御守り

・埼

芽が出れば夫を呼び花咲けばまた夫を呼ぶ我が家の庭作り
物言わぬ草木に花の咲く季に我にも氣力の戻りて来たり
利休若葉の覆う窓辺に経唱う六月二十三日慰靈の日に
田植え済む墓所の辺に早苗そよぎ蛙鳴くを母も聞きおり
一年に一度の苦行なし終えてうな重定食遅い朝食
災害と自然の恵みと紙一重線状降水帯を予報士は説く
雨上がり外を歩めば庭木々の光沢映えてみどり葉の濃し

山下雅子

葉

・習

里山の登山口なる道に咲くキランサウの花ひさびさに見つ
金指小草の別名チゴクノカマノフタこれで蓋などできるのかいな
麻布なる十番稻荷「順調」とふお守りありて授かりてきぬ
藤井七冠勝ち将棋にも「僥倖」とふ言葉このごろ使はずなりぬ
新名人誕生告ぐる朝刊のわがスクラップにすたすたとなる
「ボスティングいたします」との投げ込みが爺、婆の家にムダと読み捨て
コロナ三年わが体力落ちさまよアスファルトにも山の杖もつ

母の遺しし猫を世話して二年過ぐ見知らぬ猫がいつしか混じり
目を経つつ瘦せ衰えてゆきし猫腹のしこりがわが手に残る
屋内にいつ入りしか我のみに懷きし猫が横たわりおり
今日こそは病院にと思いたる春ふかき日に虹の橋わたる
橋の袂のあたりで待てよ裏庭に墓をつくりて花を供えぬ
わが庭に来て遊びしは野良なりしか分からぬままに命を看取る
行きずりの猫を看取りて心寂し命終はつねに寂しきものを

山野幸司 梶

・沖

横田敏子 「推し」

・福

おもむろに夜の明けそめし傍らに妻の寝息にしまらく遊ぶ
 そこはかと寝ながら思う一日の農事の手順繰り返しいる
 繰り返す今日という日の平凡さ尊きものとゆづくりと立つ
 人知れず樹々に囲まれ家残りいくつの権位かれゆきしを
 涼やかに地にはう虫はおだやかに季節の風を受け流したり
 止むことのなき雨からむ煙にうね築くわが汗乾く間もなし
 かかえられ義兄は重たく沈みたり梶は暗く朝日の中に

山本 孟

自覚めても

・大

磯田ひさ子 鳳凰

・森

牛乳を最期の日まで飲むと決めその乳白色に口をつけたり
 手始めに井伏を読めばこさへ方に目が離されず深夜に到る
 目覚めても頭の芯がけだるくてソファーころんと寝まで眠る
 独り居に食のヘルパー、頼る医師、足のリハビリ生きねばならぬ
 目に留まる母のゴミか近づけば動き出す紙魚おだぶつとせり
 リハビリに通ふ老人の愚痴を聞き治療続ける若き療法士
 メタセコイア苦生すまでに古びたる団地一人の子供の故郷

養学登志子

A I

・凌

市原やよひ 妻秋

・萬

桐の花空が見たくて咲きましたほろほろ地に落ちて言う
 ひやりとして思わず引きし手の甲に仕りおる青雨蛙
 働いて働いて死ぬ蚯蚓はもかわゆいなんて誰も言わない
 「A Iは便利ですねエ」老人はドローンの落とす弁当胸に
 こんなとき逝ってしまってどうするのひかり残して大江健三郎
 鏡の中一瞬訝る表情に打ち消していぬ明日は来るから
 それなりの歎の寄るならそれなりに良き歎なるべしなば笑おう

福島のこの青空を届けたし 今日も豪雨の続く九州
 生きがいは「推し」とう時代わが推しは未だ定まらず焦るな
 雨の日は朝から独りレトリバーを抱きて長く雨を見ており
 繰りぐるみなれど大きなレトリバー居るだけで良いいつも隣に
 十三回忌の夫の卒塔婆に記されあり「逢花打花・逢月打月」
 「咲いている花を美しいと思い、月を見上げて灯りと思う」と
 そこにある世界を素直に感ぜよとう神の言葉に心震えぬ

梅本武義

梅雨の晴れ間

・羊

小野雅子

半夏生

・羊

かの岐路のこと思いいつつ散策す今日はこの道ほととぎす鳴く
 悠々と青大将が鱗乾す梅雨の晴れ間よ石投げて遂う
 妻愛する庭の花の名外つ國のことばに聞けばすぐ忘れる
 うぐいすを聞くわが耳に電話受け驚く妻の声、訃報らし
 また翅の無きキリギリス追い立てて梅雨の晴れ間を繁る草刈る
 親族が年に数回風通す空き家二戸ありいつまで続く
 進歩する医学に元気をもらうわれ遠田の蛙ぬるま湯に聞く

大浪美雪

雨粒

・森

スカイツリー塔の先端雲の中まとひつくやうな大氣の流れ
 アイスコーヒー飲みさしのままパソコンにめりこむ女締切り間近
 花束を抱へたるひと降りゆけり車内に広く百合の香残し
 疊つてもなほ暑き日の電線に止まりて鳩は何を見やるか
 雨粒のフライングなるか大粒のひとつ光を引きて流るる
 草原を渡りくる風夏至の風心地好きかなさやさやさやさや
 あ

奥田陽子

芽吹き

・羊

西空にクレーン黒く影となり空氣やさしき春の夕く
 風に乗り花の香りは胸ふかく入りくる滑くするとき香り
 越しゆきし人の楳あたる名は知らぬ六月に咲くうす紅の花
 白い葉は花に代はつて虫を呼び縁に還るといふ半夏生
 豪徳寺の小徑に生ひし半夏生 共に愛でたる人なつかしき
 数学の恩師百歳でみまかりぬ二二年二月二二日に
 赤いランプの指示するまにパネル押し無音でユニクロで買物をする

神田鈴子

六月の尽

・大

「父の日」のなき世に若き父逝きぬせめて供へむ熱きコーヒー
 マスクはづし五類移行の街をゆくわづかな不安消えざるまに
 ちらほらとマスクはづせる人もゐてバスの座席にほつと息つく
 整然と早苗のならぶ水張田に夏空うつす六月の尽
 見慣れたる田畑は消えて知らぬ間に「建設用地」の看板が立つ
 予報通り雷雨となりし帰り道川の流れとまがふ道ゆく
 拿させどすぶ濡れとなり帰りつく体も心も冷え冷えとして

上林節江

六月

・鴎

カレンダーのしるし見ているその面輸入院の日の迫りて陰し
 ひとり居の食は進まずと友言いき食卓に夜の雨音を聴く
 報告の電話に深き息つけりそれより今日の始まりとなる
 眠りより醒めたる頃か一点に凝りし思ひ日の暮れに融く
 蒔きおきしポンポンダリアの芽吹き初め雨の夕べを夫帰りたり
 大きさに驚きて見る背の傷しばらくは指になぞりていたり
 花丁えしさつきの枝に触れてあり傷ある背と窓の辺に見る

菊地栄子 春をたたずむ

・海

國井節子

半夏生

・春

ストレッチ体操の歩み二十五年月四回の例会を待つ
欠けるともなく集いくるメンバー 繼続と言う力みなぎる
八十路半ばとなれるリーダーはなおくやかに施設に過ごす
からうじて書き留めたるプログラム当番制の号令ひびく
相応に齡を重ねてありにしをリズムに乗れる姿勢うつくし
いつしかに仕草異なるなれ合いもリーダーに添い正さんとする
集会所の庭に植栽の桜花爛漫と咲く春をたたずむ

北山雪男 大阪の雨に挫かれ

・伊

メールにておよそ片付くこれの世にわたし厄介者の手紙派
是非も無く乗る新幹線ひと世の時の明かざるしがらみのため
東京は乗り換への駅いまはもう待ち人をらぬ星の街への
忘れたき名前にあはれ出喰しぬ相合橋を渡りそこねて
途中下車したるばかりに時代より取り残されて仰ぐ夕空
「アホやなあ」と一つ咲き髪を剃る鏡の中の侏儒見つめつ
ひとはひと深入りするなど大阪の雨に挫かれ引き返したり

草刈十郎 花筏

・世

春の海島々笑ふその中に箸置ほどの船行きてをり
一球ごとよめきやまぬWBC春灯しきりに揺れる川面
四月馬鹿笑ひ合ひたき人もなくひとり炬燵に時過ごすなり
天国へ移住の友を思ふなり余命いくばく花は葉となる
花筏曲がり切れないひとところ水は静かに流れゆくなり
この子らの作る世の中見てみたしランドセルより足生えた子ら
赤ん坊小さき体のけぞりて秘めたる力春風のこと

昨夜の雨草の葉先にかがやきて万のダイヤを踏みゆく思ひ
木の葉舞ふ日まだりにゐて花を見て風の音聞き老いてゆくなり
枯草の下より芽吹く若みどり葉ころがしが穴へと急ぐ
半夏生みどりの中に冴えざえと裏葉の揺るるはや夏はきぬ
ほの暗き橋の裏にもきらきらと水の波紋はひかりを返す
佐保川に戻りて来しとかホー螢久しく会はぬホー螢
人生はゴールの見えぬマラソンぞ老いの坂道ころばぬやうに

河野繁子 後ろ姿

・雁

えにしあり生活の大半知らねども達筆の文最終と受く
大切な余命の一 日全国大会に逢いに来ませり再び会えず
薰風とう少女の像あるキャンバスに人影なきや君歩まずや
反抗を胸におさめし幼き日ひとりの居場所にムラサキカタバミ
植えぬのにそそと花咲くカタバミにここにいたのと届まりて会う
青き田に抜き足さし足跡のいて朝はひとりの朝食をとる
うつしよに記憶を置かぬ人と住み晴れの日ばかりと夏椿落つ

近藤栄昭 毛玉

・虹

糠立つ子に毛玉と付きいる父親か細々しいこと嫌われている
ステルスが正体あらわし仇札見すさあこれからまだ動けるさ
夜の森敷布にバタッと虫止まる仕掛けは思わぬところにありて
殺そうと狙つて殺そう弾の飛ぶ盾のなき大地に人々の列
一致する方向得たいに無言とは否か消えろよ無気力民族
もの言えば進行される映像か無言広がるこらえて抱き
戦争は懲りたはずではなかつたか忘れるヒト属力もつ者

近藤芳仙

農耕詩歌

・信

佐藤道子

小公園

・甲

雪解けの水面ひからす千曲川 遠からずふく南風がまたるる
ことのほか心のはづむ季いたりいつしか農の段取りをする
野はぬくくいちめん緑の陽の光 錆にたがやす土もかがやく
木の末に鳴くうぐひすの声も澄みゲンノショウコは五井のむらさき
錆もてばいしか椋鳥よりきたり電線のうへ木の枝のへに
働きかへす土中にひそむ小虫さへ野鳥の眼に見ぬかれてをり
まもりゆく一つにかぞ農作業 苗うゑながらここが一番

坂上直美

昔語り

・天

ほととぎす昔ひとたび聞きてしよ五月の間にふと思ひ出づ

今いちど声を聞きたしほととぎす金刀比羅宮の長き階

「あの声がほととぎす」と言いくれし年上の友会えず年過ぐ
なつかしき昔語りよ施設なる卒寿の人のもとに集いて

そのかみにそぞろ歩きしシャンゼリゼおぼえてますか卒寿の友よ
叶うなら今ひとたびの旅もがな石畳の街古き羅馬へ
長く長く生きねばならぬブーチンが死んでロシアの変化見るまで

坂出裕子

ひととき

・洛

人生の幸と言へるは何ならむ五重の塔を仰ぐひととき

しづかなる時をいただく子等と来て五重の塔を座して仰げる
コロナ下を子と訪ひ来たるお御堂に大日如何ほほゑみたまふ
現し世のことと思へず子等と来て大日如来拝むひととき

永遠の時の流れのひとときを静かに目守りたまふ御仏

公園の散歩の道に拾ひたるくれなる落ち葉今日のしあはせ
真夜中に目覚めて歌を書き留むる幸を得たる長く生き来て

小公園朝々きれいに掃く人の明るき笑顔に今日も青天
たつぶりと花に水やり帰りゆく自転車の人見送る今朝も
八十の手習に俳句をはじめしと弾める声の妹の電話
落葉一つ無き小公園気が散り小さきベンチに人休みゆく
肥料水たっぷり恵まれ公園のベコニアふんはり背のびして咲く
色形さまざま華やぐ紫陽花に万太郎さん困る現代
ふさふさと丸く大きな紫陽花は昔ながらに七変化する

篠原まり子

彌生さん

・羊

俊足の彌生さんは追いけず久留米の町で見失った日

吉野ヶ里見張らし橋かけ登る彌生さんが居る誌面のページ

奇しくも彌生さん憶う日石棺墓開かれて騒然吉野ヶ里遺跡

窓に見る望月さえも痛ましくおちこち伸びゆく豪雨のライン
咳ひとつすれば小鳥がチイと鳴く小さきいのち繋ぎ合う真夜
ほんのりと紅の色差すスマーケ・ツリー燃えることなき庭を巡りぬ
ゼレンスキーブラックのTシャツさりげなく名優めきて「平和が夢」と

柴田登志恵

細姫鶴

・天

四本の線路をわたる陸橋の歩道を細姫鶴がゆきぬ

細姫鶴レンガ歩道の縦目ゆく わたしはつき目 単なる縦目
そそくさと歩道横切る細姫鶴から神へ前ばかり見つ
朝十時強き日差しにあたたまり姫鶴のいのちみちみつちから
街に棲む姫鶴はしこくひそやかに今日も太古の時を生きをり

いにしへも洪水ありしが爆破とふ 始祖竜さまもびっくりと姫鶴
新参のホモサビエンスなぞ関はりを持たぬがよろし姫鶴つややか

須川千恵香 カサブランカ

・眉

閑根和美

桐生天満宮

・埼

玄関にカサブランカの蕾束 批杷 野菜類置かれし人は
ひらめきて電話に問へば「何故わかる」謎解けたり親しき声に
花器選び亡夫との旅に求めたる胸張り瓶に文定め挿す
茎三本 蕾三倍卓上をカサブランカは仏間に占むる
玄闇まで香りく大百合開きむ紅六片 不意に声上ぐ
目覚むればカサブランカの咲くさまに会はむと階段降りゆく工夫
咲き揃ひ一時の満絶せゆける香りも失せて寂しさ秘むる

鈴木結志 バイオリズム

・福

朝刊の記事のうれしも少女期に馴染みし社の文化財となる
往還の突きあたりに大きな天満宮そぞより天神町 三十目に住む
天神の森の背後に広がれる群大工学部ぬけて近道
いまなおわざかにのこる工場の城のひびきのなつかしきかな
のこぎりの形の屋根の町工場パン工房に交わりにぎわう
染めたるを川にさらして掲げ干す軍旗のことき景もまばろし
栄光は過去のこととし口ずさむ西の西陣東の桐生

高尾恭子 傷口

・大

詩はわれのこころの花と夢おこす詩情の棲間月さして咲ゆ
うそかえに今日を足らうるうた詠みて星の輻射のひかりをあおぐ
科学者の想像火星こうさんのゆめの世界や如何にときゆく
インターバル歩き目の前一存の散策に見るタンボボの花
故事にいう「他山の石」をうべないて思いあらため書芸にはげむ
村夫子などと言わるほど生きて筆に技練る日々の手習い
自らのバイオリズムにはからいて感情の中の詩を練りつむぐ

関根榮子 イヤリング

・埼

高津砂千子 友

・風

ゆっさりと白き紫陽花枯れあえりここにとどまる小さき至福
この家の紫陽花は赤にて隣り家は真青と梅雨の道楽しめり
近頃は事を成す時ふと思う氣力と体力どちらが先か
憶劫と思ふことなど増えくればいつしか一つ二つと止めて
マスクにてイヤリング付けざる年月を思いつつ手に取りて眺める
亡き友の家清やかに静もりて門辺に待てば出で來ることし
人住まぬ家となりても手入れされ友の好みし山法師咲く

「木造の三階建を修復せし見学日きょう」新聞に見き
亡き友の生家なりにき新聞の記事にきりしめ尾道へゆく
尾道で過ごしし日日を語りいし友のすがしさ今も忘れず
一面のしろつめ草の中に立つ五重塔に見ほれしわれら
「あじさいき」林英美子の像の前捧げられたる花束あまた
尾道の英美子の像によみがえる「風も吹くなり雲光るなり」
ゆくりなく「あじさいき」に会う亡き友が招きくれたる僥倖かれ

滝田靖子 A.I

・新

田土才恵 ピーマン

・宙

働く夢に目覚める憂鬱のいつまで続く職退きしのち
採血を失敗したこと失敗を罵られたこと思ひ出す今も
A.I.の作る短歌に涙するそんな日がもう来てるんだらう
感情も心も持たぬA.I.がわらの何を搔さぶるだらう
感情も思考もコントロールされ知らない未来に導かれていく
A.I.がそのうち告げてくれるだらう「そろそろあの世に行く時間です」
眼つたのか起きてゐたのかもおぼろげな明け方通販番組見てゐる

竹下妙子

線状降水帯

・霧

人界にあらざるもののが優しさを見せて夕べの月はさやけし
いく年を鳴きつぐ定めか野の鳥も春には透る声にて鳴けり
素足もて野の若草を踏みゆかむ身にやはらかきものの恋ほしき
おらびたき日もあらむかドクダミは白き十字の花を零せり
わが掛ける眼がねの端に映りる背なは青空はつ夏の色
カサブランカ十二の花を持つからにひとりに余る香りただよふ
洪水避難命令あり膝痛み持つ吾は術無し

田土成彦

空洞

・宙

久我田鶴子

発芽

・羊

正面にピーマンの種芽吹きたり時とき伸びとき今を楽しむ
雨露の消えぬべくあれ紫陽花を潤しわれの心うるおし
遠退きてゆける消息コロナ禍は加速度上げて巡るさみしさ
幸いは育て行くものか緑の葉艶めくハイオベティルムの白
テキパキと片付け上手なもう一人の私が欲しい明日は来客
たおやかに着物姿のひとが行く京都の路地のその曲がり角
詠み溜めて心の糧となしゆかん駄作といえどわが身の一部

玉井綾子

紫陽花

・羊

マスクするしないは個人の判断となりて夏日にアナベルまぶし
一軒家の並ぶ町内植え込みや庭ごと異なる紫陽花の咲く
見上げての桜に目線の紫陽花に中一で出会う初の先輩
二階から見ればシマトリネコの木は黄緑の花打ち上げている
薄然に雨戸開ければ青白きスカイツリーと金の三日月
明日のこと思い脈打つ内壁を抑えんと強炭酸水飲む
夏至過ぎて変色しゆく紫陽花や再雇用されし人の苛立つ

おまへより重くてあなたより軽い「きみ」といふ語の中途半端さ
投入堂建てし匠の腕の冴えいまに留めぬ名は留めねど
飛騨の匠六太の石工岩持持つ彼らの技術を愛でし日本

機械だから仕方がないといつまでも鳴る目覚ましは聞こえないぶり
チヨコボール転がつてゆけいつまでもころがつて行ける事はないから
一千分の一ミリの差を見分けると機械ではなく指の感覚
樹には樹の悲しみがあり千年を生きた証のおぼき空洞

労働意欲おし鎮めみん航跡のよるは白毫光となれるひとすじ

労 働 久我田鶴子

くどくどしく吾はいわねと労働に怒鳴るほど生に熱中した
き

くどくどとは言わない。だけど、とにかく生きることに熱中したいんだ。夢中になつて働いて、それでもって時には怒鳴ることもあるくらいに。率直な声が響いてくる歌だ。身体を酷使する労働に、生の実感を希求する、作者の思いの強さ。それはどこから来るものだったか。

冬の日をいま浴びはじむ労働と時がは・が・ねと響きあいつつ

こちらは少し難解な歌だ。三句目以降の「労働と時がは・が・ねと響きあいつつ」が掴みにくい。冬の朝日を浴びはじめる。そこに「いま」と入ることで、臨場感が出ている。労働はすでに始まっている。おそらくは、早朝の甲板での作業だろう。

「労働」と「時」と言うことで、具体的な作業は抽象化される。問題はそこから先だ。は・が・ねと響きあう「労働」は・が・ねと響きあう「時」。比喩のように「は・が・ねと響きあいつつ」が用いられている。厳しく鍛え抜かれたは・が・ねのようになるまで自らを追い込んでゆく。そのようにしてようやく得られる〈生きている〉という実感。生の輝き。

労働の意欲は漲つているようだ。夜の航跡を眺めるのにも、それを押し鎮めようしなければならないほどに。

それにも、「よるは白毫光となれるひとすじ」の美しさ。心を鎮めて、ほう一つと一筋の光となつた夜の航跡を眺めるひとときもあったことにほつとする。

オーマンは、オーマンのこと。アラビア半島南東端の首長国だ。イギリスの影響下にあり、一九七〇年に独立した。作者が訪れたのは、独立以前ということになる。

「錨地」は、停泊地のこと。航海の途中、オーマンに碇泊し、ちょうど暗だったので暗れているうちに船体に塗料を塗る作業をしたのである。船体の塗装は、銹打ちとともに船体維持のための大変な船員の作業である。汗まみれになつてするその作業がもたらす充実感。

「労働」には、次のような歌もあった。

労働の忿怒ならぬと掛けばけ赤道の陽を浴ぶこころ
はげみ経し労働のうえの六年をにがき充実とわが妻はいう
労働にたちむかいゆくわが性おおく叛骨にしてひたぶるな

り

今月の二人

いとおしい春

吉田美佐子

リハビリ中

満月は向かいの棟の上に出て今宵もいいな明日も良くなる朝が来た五月晴れだよまぶしいな遠くに見ゆる金剛山の勇姿卵焼き私の役目海苔入れる味付けは良しさあ金曜日

ご飯無く焼きおにぎりのチンをする醤油味でとても美味しい風邪気味だ頭も痛い鼻みずも火曜日なのにリハビリどうしよう

病気の後リハビリに向かうバスの中話も弾む顔見知り増えたやまい得て辛い思いもしたけれど感謝の気持ちたくさん増えた許されて許されて今生かされて今日の習字は楽しかったなビスコ買う今日は来るかな孫のため喜ぶ顔が目に浮かぶ朝残る人疎遠になる人それぞれに病気してみて分かる人の縁心ある優しい人が好きやなあ今日思いました私もそうなるようふるな空はどんだけ器ある降つても降つてもまだ降り止まずいとおしい春のいち日はかなくも散りゆく桜ながめるまにまに

いまから三年前らしい。急に頭が痛くなり、救急車で運ばれ、その日のうちに即、手術がされたらしい。いま残っている傷は頭に四つの穴とおなにに十センチ位の傷です。助かる見込みは三割と言っていたよと、今頃になって家族から聞かされました。八ヶ月の入院生活と、二回の手術もしららしい。後遺症らしい後遺症は見た目には解らない。だけどわたしには解ります。こんな私ではなかつた。車の運転や人との交流も自由に出来ていたのに。

いまは習字やちぎり絵を含む週四回のリハビリに行くことと、川口聰子さんの紹介で地中海に入会し短歌を田土才恵さんのスマホに送ることが日課になっています。

手術前の記憶は消えてしましましたので、一から人生です。料理も忘れてしまいました。だから卵焼きを作ることが私のいまの役割です。それと、早寝早起きに努め、目が覚めたらベランダから外の景色眺め鳥のさえずりを聞き、雲の流れを見ながら五七五七七と指を折ります。

今日は土曜日なのでリハビリはお休みです。だから、おやつを買って家で孫が来るのを待っています。

マルチバース

遠藤美智子

短歌作りは生活のスパイク

今月の二人

大学へ行きたしというわれの背を押してくれにき小卒の父
 いつの日か生まれ故郷の追浜を案内する夢を父は語りき
 とつくりとぐい呑み三つ遣したりこよなく酒を愛せし父は
 われに親しきぐるりの山を〈息苦し〉と海辺育ちの恩師は言いき
 枝先に熟柿ひとつを残しいるきっぱりと葉を落としたるのち
 立ち枯れのすすき広がる冬の野に水の匂いの雪降り積もる
 カートにて店内を回る母と子が大きな空気のボールをつくる
 リハビリの散歩の話受話器より母の明るき声が流れる
 レトルトのカレーライスをディナーへと変えたりカベルネのワインの渋み
 買い物に心満たされ店先にわが自転車を忘れ帰り来

昨日より今日へと変わるときの間を鏡の中のわれと対話す
 のような人生を〈われ〉は送りいるマルチバースの或る星に生きて
 読み方も意味も不明の言葉たち短歌の森を今日もさまよう

千葉の柏で仕事をしていましたが、私の定年退職を待って母の介護のため、夫婦で故郷の福島に生活の中心を移しました。
 短歌は難解な文学というイメージがあり、自分で作ったことは今までありませんでした。こんな私ですが、友人の勧めで短歌を作ってみようと思い、新樹の会に入れていきました。すっかり銷び付いてしまっている頭と感性を何とか動かして歌を作ったましたが、五・七・五・七・七の三十一音を形作るのが精一杯で、やはり歌を詠むということは難しいなあと感じました。それでも新樹の会のグループ長の藤田美智子さんにいろいろ教えていただき、続けることができています。歌にならないような短歌を作りながらも、新樹の会の皆さんにも温かく接していただき、楽しく活動しています。

短歌作ることは自分自身や家族のことを考える良い機会になりました。日々の生活の中で流してしまっていたできごとや思いを掘り起こし、形あるものにしていくことの大切さ、大変さを感じています。ささやかな日常を短歌という形に少しでも表現していきたいと思っています。

◆今月の二人・吉田美佐子作品評◆
心ある優しい人が好きやなあ

吉田さんは、大阪市在住。三年前に急に頭が痛くなり、即手術。一命は取り留めたが、手術前の記憶は消えてしまった。現在はリハビリ中だという。

・満月は向かいの棟の上に出て今宵もいいな明日も良くなる
満月が「向かいの棟の上」に出るという。そこから下の句の「いいな」「良くなる」に。「葉の出方が素直で、明るい。
・ご飯無く焼きおにぎりのチンをする醤油味でとても美味しい
気づいたらご飯が無かった。で、電子レンジで焼きおにぎりの解凍をする。それで十分満足。悠揚迫らぬ感じがとても良い。
・病気の後リハビリに向かうバスの中話も弾む顔見知り増え
吉田さんは毎朝、グループ長の田土才恵さんのスマホに作品をメールしているらしい。五七五七七と指を折って言葉を並べている姿が目に浮かぶようだ。それもまたリハビリになってしまことだろう。この歌の、リハビリに向かうバスの中での様子、「顔見知り増え」は手術前の記憶を失った人が新しく人生を切り開いている姿なのである。

・心ある優しい人が好きやなあ今日思いました私もそうなるつ
この歌もとても素直な歌だ。「好きやなあ」という関西弁がやわらかに響いてくる。下の句は字余りになっているが、定型に押し込めるというのではなく、ふわっとした感じが良い。
・いとおしい春のいち日はかなくも散りゆく桜ながめるまにま
に

散りゆく桜眺めつゝ思つ、春のいち日の愛おしさ。「まにまに」のあたりに、そこに身を委ねている感じがただよう。

◆今月の二人・遠藤美智子作品評◆
きっぱりと葉を落としたるのち

評者・久我田鶴子

遠藤さんは、福島市在住。定年退職後、母の介護のために故郷の福島に夫婦で生活の場を移したのだという。

・大学へ行きたしというわれの背を押してくれにき小卒の父
大學へ行きたいという娘の背中を押してくれた父。言い尽くせない感謝の念が作者にはあるようだ。結句は、字余りになつても「父は」と助詞を入れたほうが良いかもしない。

・枝先に熟柿ひとつを残してきっぱりと葉を落としたるのち
晩秋の柿の木か。落葉し尽くした木の枝先に、たった一つ熟した柿の実が残っている。それだけを描いたところに、なにか象徴的なものが感じられる。「きっぱりと」と表現したところにも、この木のあり方に強く共感している様子が窺える。

・リハビリの散歩の話愛話器より母の明るき声が流れる
母とは同居しているわけではなく、近くに住んでいるらしい。リハビリをしている母からの電話。その声の明るさに、元気でいる母を感じとっているようだ。

・買い物に心満たされ店先にわが自転車を忘れ帰り来
買い物に行って、店先に自転車を忘れてきたとは、なかなかのドジぶりに笑ってしまった。それほどまでに満足のいく買い物だったのだろう。「わが自転車」の「わが」は不要かも。

・どのような人生を「われ」は送りいるマルチバースの或る星に生きて
マルチバースとは、複数存在する世界同士が接続されていない且つ無限に存在するという考え方。どこかに別の人生を送っている私がいると思うことは、今の生き方にどう関わる?

私が生まれて初めて接した短歌といえば、小学生の頃知った百人一首に始まるである。当時の私には歌の内容は全く理解できなかつたが格調の高い言葉とゲームとしての面白さに惹かれて一首でも多く憶えようと努めた。正しく言えば、これらは短歌ではなくて和歌と言うべきであるが、私が遅まきながら短歌を詠むきっかけとなつたのが一首の和歌なので、ここでは和歌・短歌の区別なしに「歌」とさせていただきたい。

大学の受験に失敗して予備校に通ついたとき、国語の講義で文芸評論家の小林秀雄さんが秋の夕暮れを詠んだ三首の名歌いわゆる「三夕の歌」の各々を評価した論文の解説を受けた。この中で小林さんは、西行法師の「鳴立つ沢の秋の夕暮れ」を他の二首よりも格段に高く評価して文章の大半をこの歌の解説に費やしていて、「心なき」私にもこの歌の優れていることがおぼろげながら分かった。そのとき未だ子供だった私は鳴という鳥を全く知らなかつたので、この歌は一羽の鳴が川辺を飛び立つて秋の夕陽を受けながらねぐらを目指している光景を想いついた。ねぐらを定めぬ草枕の旅をする西行、鳥と較べた我が身の侘しさを詠んだものと單純に考えて済んでいた。

それだけに後になつて思い掛けない機会に

生れたが格調の高い言葉とゲームとしての面白さに惹かれて一首でも多く憶えようとしたが、これらは短歌ではなくて和歌と言つべきであるが、私が遅まきながら短歌を詠むきっかけとなつたのが一首の和歌なので、ここでは和歌・短歌の区別なしに「歌」とさせていただきたい。

大学の受験に失敗して予備校に通ついたとき、国語の講義で文芸評論家の小林秀雄さんが秋の夕暮れを詠んだ三首の名歌いわゆる「三夕の歌」の各々を評価した論文の解説を受けた。この中で小林さんは、西行法師の「鳴立つ沢の秋の夕暮れ」を他の二首よりも格段に高く評価して文章の大半をこの歌の解説に費やしていて、「心なき」私にもこの歌の優れていることがおぼろげながら分かった。そのとき未だ子供だった私は鳴という鳥を全く知らなかつたので、この歌は一羽の鳴が川辺を飛び立つて秋の夕陽を受けながらねぐらを目指している光景を想いついた。ねぐらを定めぬ草枕の旅をする西行、鳥と較べた我が身の侘しさを詠んだものと單純に考えて済んでいた。

それだけに後になつて思い掛けない機会に

本物の鳴と至近で対面したときの衝撃はとても大きかつた。

私は幼い頃から物作りの仕事にあこがれて技術職を選んだので、勤務したのは全て工場だった。東京江東区のある鉄鋼製品の工場に勤めて数年経つたある日、ひとつのお工場棟に入ると人口に近い作業機の傍らにダンボール箱が置いてあり、中でゴソゴソ

私と短歌との 出会い

253

神戸 良三

に飛び込んで向こうの窓から外に出ようとしてガラスに激突して落ちてきた。元気になつたら放してやろうと思つていて。私は本当に鳴だったのか。どうしてあんな小さくて目立たない鳥が秋の夕暮れの主役になることができるのか。色々と想ひをめぐらせてやつと答えに辿り着いた。西行の歌に詠まれた鳴は、単独のものでなくて鳴の群れなのだ。この賑わしい集団が去つた後に残つた西行は、自身が何の群れにも属さない孤独な漂泊の身である寂しさを想い、間近に迫る冬への不安も重なつて言ひ知れぬ寂寥感に包まれたであろう。この想いは「心なき身」にも感じられるほどだった。

本物の鳴と対面したことでの感動を認識する西行の感性と表現力の偉大さを認識することになり、私は思慮の浅かつたことを反省した。それまでは特定の和歌や短歌を中心にして留めることの無かつた私だったが、この体験後は折に触れこの歌が想ひ起されようになつた。また、私が還暦間近になつて短歌を詠んでみたと考へるようになつた動機のひとつには、孤独の寂しさを切々と詠んだ西行の、「鳴立つ沢の秋の夕暮れ」への想いもあると考へている。

「そうだよ、そそかしい奴でこの建屋に思わず訊きかえした。

「えつ、これが鳴ですか。本当ですか。」

「そうだよ、そそかしい奴でこの建屋に思わず訊きかえした。

「えつ、これが鳴ですか。本当ですか。」